

ブラームス作曲《ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ》Op.24 についての一考察
— 変奏曲の連続性 —

A study on *Variations and fugue on a theme by Handel* op.24
by J. Brahms: from the aspect of continuity of the variations.

音楽文化研究科 音楽表現専攻 07-1035 藤井 遼子

本研究は、ヨハネス・ブラームス (Brahms, Johannes 1833-1897) の《ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ》op.24 の各変奏の連続性について述べたものである。連続性という言葉は、筆者の演奏体験に基づいたものであり、ある変奏から次の変奏までの移行部分を連続して演奏するか否かという点に関わる。本研究では移行部分を連続して演奏する場合を「連続性が高い」、連続して演奏しない場合を「連続性が低い」と記した。

記譜上では移行部分においてさまざまな表記があり、なかでも「フェルマータ」と「アウフタクト」を軸として、移行部分を分析し、考察した。

移行部分を分析する際に、4つの項目に分けておこなった。①フェルマータ単一の要素による移行部分、②アウフタクト単一の要素による移行部分、③フェルマータの要素とアウフタクトの要素が重なる移行部分、④その他の要素による移行部分、である。

以上の4つの項目で、全25箇所の移行部分を分析したところ、連続性が高い移行部分は計16箇所、連続性が低い移行部分は計8箇所、両方の可能性がある移行部分は計1箇所となった。これにより、連続性が高い部分が多いため、この変奏曲の連続性は高いということが分かった。

こうした連続性の高さから、ある変奏からいくつかの変奏までのグループ化という可能性が考えられる。グループ化する場合は、移行部分における連続性だけでなく、個々の変奏の変化といくつかの要素の維持を捉えて結びつけることがあげられる。グループ化の方法はさまざまであり、演奏者の解釈と経験の集積によって発展するものだろう。

本研究では、変奏の連続性がグループ化することへの意識を起こす要因の1つであるという結論をえた。